

塩浜小二年 あつや

ぼくのおかあさんは、こうがいぜんそくでながいことびょういんで、にゅういんしていました。

ぼくは、まん二さいのときからおかあさんといっしょにびょういんにいまして、雨がふったり、曇ったときなどは、みんなぜんそくのほっさがひどいので、ぼくはかんごふさんのところへ、たのみに行つてやりました。

ぼくが、あまりじょうずに、ちゅうしやといえないので、みんなの先生たちが、よくわらいました。

ことしの九月一六日のあさ、おかあさんはいよいよほっさがおこつて、「くるし



い、いきがつまる。」といいながらいきがなくなつて、きゅうきゅう車でびょういんにはこばれて行きました。

車のなかですぐにさんそきゅうにゅうにかけられていても、なかなか気がつかずに、びょういんで先生たちが、三人でちゅうしゃをしたりしていましたが、三時間たつてから気がついたそうです。

ぼくはおかあさんがしんでしまふかと思つて、しんばいでしんばいでなりませんでした。

その日は、みんなよその人たちもひどいほっさがおこつていました。ぼくたちのもとでもだらにも、たくさんぜんそくで、くるしんでいる子がいます。そんな子を見るとかわいそうでなりません。

ぼくたちにもつとききれいな空気がすえるようにしてほしいと思います。学校からかえるとき、こうじょうのほうをみると、ものすごいけむりが出ている。そんなときは、おかあさんのことを思いだして、にくらしくなることがあります。

(一九六九年五月)

塩浜中一年 喜代子

私の母は、公害ぜんそくで入院して  
います。

雨の日や、どんより曇った日などは、  
ぜんそく発作もひ  
どく、うなりなが  
ら朝の仕事をして  
います。

私たちは、母が  
入院したばかりの  
ときは、本当に淋  
しい悲しい思いを  
しました。

わたしが三年  
生の時に、見るに  
見かねて、福井の  
おばさんが、妹と  
いっしょに預かっ  
てくれました。み  
んなとても優しく  
大事にしてくれま  
した。が、それで  
妹は、母のいな  
り家でもいいから  
帰りたいといっ



毎日泣いてばかりいて、おばさんを困ら  
せてばかりいました。とうとう一ヶ月余  
りで帰ってしまいました。  
ひとり帰った妹のことが心配でた  
まりません。

ある日、妹は淋しさのあまり病院にい  
る母の所へ行く途中、遊びながら歩いて  
いて、川に落ちておぼれかかっている  
ところを知らない人に助けられました。

私はそれを聞いてすぐ帰りました。妹  
一人がお人形で遊んでいるのを見てい  
ると、妹が、私の顔を見るなり、わあっ  
と泣き出しました。私たちはしばらく抱き  
合っていて、泣いていました。そのこと  
があってからは、母は悪い体をおして毎  
日、家に帰らしてもらおうようになりました。  
私たちも、母に長生きをしてもらいた  
いと思つて、自分たちでできることは、  
なるべく母の手を借りないようにしてい  
ます。

早くきれいな空気を吸って、みんな幸  
せな日を送れるようにしてください。病  
気で苦しんでいる人たちのためにも、お  
願ひします。

一九六八年十一月

ぼくたちの学校のそばに、こうがいとくすこうじょうがいくつかあります。日本では、こうがいは、四日市です。こうがいはいくさくたくさんあります。このうがいの中に、目の見えないくらいのつぼつぼが、風にふかれています。つぼつぼは、そのつぼつぼをすうと、からだのよわい人は、ひどいのがはしかくたくるしみます。こうがいは、ひどいとき、いきりみえません。

つぼつぼやけむりのようなこうがいのほかに、ありゆうさんガスというこうがいがあります。このありゆうさんガス、おはまびょうだにわるいそうです。いま、



いるこうがいかんじや、また、おうらにこのガスで、まい日、くるしんでいます。この間、ぼくのおとうさんのよく知っていた人が、しおはまびょういで死にました。この人は、こうがいで、声が出なくなってお話ができなくなったそうです。

ぼくたちは、こうがいのひどい日の学校のゆきかえりには、マスクをはめたり、こうがいをしたり、かんおまさつをして、こうがいにまけないからだをつくらうといっしょうけんめいです。

けれども、こうがいのほうが、ずっとつよいです。ぼくはよくかぜをひいて、のどがいたいです。せきもよくでます。こうがいは、こうばがださないうようにするのが、みんなよいことです。

そして、みんなが元気にあそんだり、おしごとができるすみよい四日市に早くしてほしいです。

(一九六九年五月)

ぼくは、よくのどがいたくなりません。そのわけは、こうじょうのけむりでなつたとおもいます。

ぼくのおじいちゃん、こうがいかんじゃです。おじいちゃん、よくさいばん（公害訴訟）に行きます。おじいちゃん、よくせきをします。おじいちゃん、よくは、こうじょうをこわしてほしいと思います。

おとうちゃんは、ときどき、こうがいのことで、よその人としゃべって、このごろは、まえよりよくはなしています。その人とおじいちゃんは、さいばんがあるとき行きます。ぼくは、早く、こうが



いをおしてほしいと思います。それに、海に、あぶらをながします。それで、つりにいって、くさいさかながつれて、ほらん（捨てる）なりません。それにさかながしぬときがあつて、ういているときを、ときどき見えています。ぼくらは、かんおまさつをしていても、けんこうの子がすくなくいです。

（一九六九年五月）

「じつがい」

わたしの学校のよこに、こうじょうがあります。このこうじょうには、いっぱいえんとつがあり、いろんなタンクがあります。

わたしたちは、毎朝、かんおまさつがあります。冬になるとかけ足があります。きよ年、かけ足で、日本一しゅうというだいでかけ足をしていました。

学校で、外がくさくなると、ほうそうで、「くさいので、まどしめて、せいじょうき（空気清浄器）をつけなさい」と言われます。

えんとつが多いので、すぐくさくなります。

えんとつから、すごい火がでるときも

あります。

(一九六九年五月)

### 「こうがいとおてんき」

あめのあさ、おきてみるとすぐくさいでした。おばあさんに、わたしはきき



ました。「おばあさん、なぜあめの日は、こんなにくさいの。」  
とききました。すると、おばあさんが、「あめの日は、こうばのけむりがおりてきてくさいけど、おてんきの日はとおくへこうばのけむりがいくのよ。」とおくと、おばあさんがおしえてくれました。

そして、わたしは四日市(中心部)へいくときも、こうばのえんとつをみながらいきました。ほんとに、おばあさんの言った、えんとつが少したかかったです。  
「おばあさん、ただいま。」  
といて、うらのなかへはしっていきました。するとおばあさんが、「ゴホン、ゴホン」といってせきをしていました。  
「どうしたのおばあさん。」  
といたら、「なんでもないわよ。」  
といました。  
「みずあめかかってきたからなめて。」  
といたら、「おばあさんが、  
「ありがとう。」  
といってくれました。

(一九六九年五月)

### 会社なんかなくない。でも…

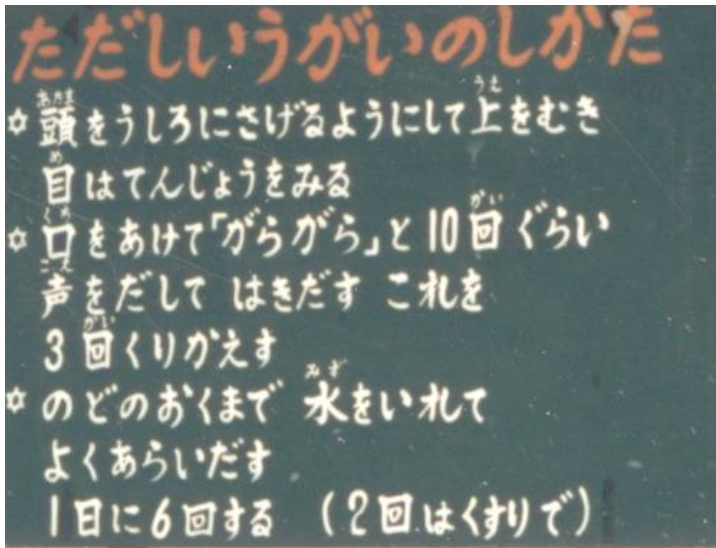
わたしは、四才の時から公害にんていかんじゃなくなっていきます。とくにひどかったのは、ようら園から一年生のころで

夜中にぜんそくで苦しうなつて、食べた物を全部もどしてしまつたり、ねつが出た息苦しくなつたりしたことでもよくおぼえています。とてもいやなことだつたからです。

二年、三年になつて、少しよくなつたように思いますが、夏が近づいて、風が

南東からふいてくるよ  
うになると  
ぜんそくが  
おきます。

のころは、  
「会社なん  
か、なくな  
ればよいの  
に。」と思  
つていまし  
たが、今は  
そんなこと  
は思わなく  
なりまし  
た。おと  
さんが、石  
油コンピナ  
ーの会社、  
なつとめ  
の家のび  
んほうに  
な



つてしまふからです。

おとうさんは、いつも「会社は、公害のためにたくさんのお金をつかつて公害がでないようにどりよくしているんだよ。」と言つています。

おかあさんは、「それでも、公害にんていかな者は、どんどんふえていませよ。」と言います。

わたしは、どういうふうにかえたらいいのかわからなくなつてきます。そして、しまいには、公害のないきれいな空気の町にすんで、おとうさんも会社につとめられて、たくさんのお金がもらえて、みんなが病気になるないような家で、ずつとずつとくらしたいと思ひます。

### いちがり

塩浜小3年 さ津子

わたしは、ぜんそくがおこつていたの  
で、学校を休んでいました。こつたの  
病のこどもたちが、いちがりにいくの  
で、からだのちやうしがわるかたけれ  
いきました。

いさかダムは、たいへんくうきがよ  
く、とてもいいきもちらでした。

わたしもみんなのように、元気がで  
きて、たのしく走ったり、とんだり、で  
きました。

くうきがよ  
かったら、わたし  
らは、みんなと、  
おなじように、た  
のしく、じょうぶ  
なからだになりま  
す。

ふじん会のお  
ばさんたちに、お  
むすびをもらいま  
した。おかしもも  
らいました。

わたしたちの  
いそづらくも、こ  
のようないくう  
きになつたら、ゆめみ  
たいだなあーとお  
もいます。



## 私は公害患者です

橋北中 二年

公害、公害とさわいでも、コンビナ  
トは知らん顔、真っ赤な炎を出して美し  
くかざっているつもりなんだろうか。そ  
んなはずがない。こわいにきまっ  
ただ、強がりを書いてあるだけだ。

あのコンビナートのために、たくさん  
のひとが死んでいき、たくさんのひとが  
苦しんでいる。公害病「ぜんそく」とい  
う、いまましい病気のために六十人ら  
かくの人の命がなくなっている今、な  
公害はひどくなるばかり。

私も五才のころから発作がおこり出  
した。年々悪化しはじめ、小学校三年生  
の秋、公害患者に認定された。

発作が起ると、一晩中うなりずめ、  
「苦しい」と自分に言いきかせること  
たえているようなものだ。十時間も十五  
時間もすわったまぜで動けず、何度も足  
を組みかえる。せきこむと汗がふつ  
とにじみ出る。小学校三年生は育ち盛  
りのに、アバラがくつきりと姿を見せ、  
体力のつくひまがない。父母をよく困  
せた。私がつうとうと眠り出すとまた  
せきこみ、涙が出て顔がくらくらにな  
った。

体育の授業が一番嫌いだった。特に走  
るのが。でも走らないと、なぜかみんな

が、私を白い目で見るようで、それがたまらなくいやだった。だから無理をして、母にしかられてもなるべくみんなと区別されないように努めていた。

中学二年ともなれば身体も大きくなり、体力もついて抵抗力が強くなるから、発作の数は減ってきた。とはいえやはり食欲がなく、というより苦しくて食物がのどを通らない。それに発作の数が少なくなつた方が、一度の苦しみ方は今まで苦しみの二倍も三倍も大きい。死んだほうがよっぽどましだと思ふのだが、私には死ぬほどの勇氣もない。

マラソン大会でも、あの人は走らないからいいな、と思つている人もいると思う。でも私だつて好きこのんで走らないわけじゃないのに……。

今、人工的に「ぜんそく」の発作を起こさせる薬があるそうだから、その薬を四日市中の人々がみんな飲んで、私たちの苦しみを味わつてもらいたいと思う。そうしたら、どんなに悪いことか、よくわかるだろう。

四日市の人々が願うべきことは、一つしかないはずだ：：：ただ公害が一日も早くなくなることだろう。

去年一年間で、公害認定患者に認定されたのが一番多かつたのは、私たちの学

校がある橋北地区だったそうだ。  
昔は住みよかつた、と母が言う。昔は美しかった、と父もよく言う。今は汚れてしまった四日市：：：これからどうなるんだろう。これ以上よごれたらどうしようもなくなくなるんではないだろうか。今でさえ、元にもどすのは無理なのではないだろうか。もうこんなになつてからは、何を言つてもコンピナートは受けつけないのではないだろうか。

(一九七二年九月)